

過剰な攻撃性を表出する青年への援助について

中 川 美 保 子

I. 問題と目的

2003年上半期は、若年の子どもによる凶悪な事件が立て続けに起こった。中学校2年生の男子が仲間によって何時間もの暴行を受けたのち死亡し、その後死体を埋められるという事件、同じく中学校1年生の男子が4歳の幼児を誘拐し暴行を加えた後、ビルから墜落死させるという悲惨な事件は記憶に新しいところである。これまでこのような少年による犯罪が起こると、マスコミをはじめとする世間の一般的な論調は「なぜ去年までかわいい小学生だった子がそんなひどいことをするのかまったく想像もできない。きつととても悲惨な育てられ方をしたのではないか。親が悪い」あるいは「精神鑑定をしたら彼らの異常性が明らかになるはず」と、どこかでこれら加害者たちの特殊性を想定してきた。しかし今回、次第に明らかとなったことは、彼ら加害者少年は「どこにでもいる普通の子ども」であり、あるいは「成績優秀でおとなしい、目立たない子」であるという意外な証言であった（芹沢、2003）。もちろんこれら普通の青少年による他者への過剰な攻撃性を伴った事件は、この数年の目新しい現象とは言えない。それは中学校2年生の男子による連続児童殺傷事件や女性教師殺人事件、K市で白昼起こった小学生襲撃事件、N県のバスジャックなど、ここ10数年の間、絶え間なく次々と起こってきた。そしてこれらの事件においても、加害者について「普段はおとなしい子」、「学校生活はまじめ」だったというような、およそ凶悪な犯罪とは無縁の特徴がその都度語られ世間を驚かせた。さらに衝撃的だったのは、これらの事件後のマスコミの調査で明らかにされた一般の子どもたちの事件への反応であった。それはほとんどの調査で「加害者の気持ちがよくわかる」あるいは「自分も犯人になっているかもしれない」という意見が半数近くも上ったという事実である（滝川、2001）。

実際、この10数年間の青少年による「他者への攻撃性」に絡んだ問題行動は悪化の一途を辿ってきた。たとえば2002年の文部科学省の調査において、公立の小中高校生が学校内外で起こした暴力行為は33,765件、いじめは22,207件でいずれも前年度をわずかに下回ったというものの依然として予断を許さない危機的な状況にある（朝日新聞、2003）。また少数の特定された生徒による授業妨害のみならず、クラスの半数以上が集団で教師の指導を無視し傍若無人に行動する「学級崩壊」現象が1990年代以降、全国的に起こっている（河上、1999）。つまり上記の世間を震撼とさせた凶悪事件の加害者のみならず、現代の子どもたちの心の深層には、「他者への過剰な攻撃性」が潜み、それが何らかのきっかけによって、現実性を帯び日常生活に浮上する危険性を孕んでいると言っても過言ではないであろう。

山中(2001a)はこのような現象をして「世の中は実に荒み、人々の心は荒廃し、少年少女らのた

ましいは、実に適切な表現をみいだしがたいほどに乾いて、どこで何が起ころうとも、すぐに『切れ』て、何が起ころうともおかしくないほどに病んでいる」と憂いている。そして子どもたちは自らの感情を「切れる」とか「むかつく」というような身体化された言語でのみ表現し、「悩む」というところの作業」なく、すぐに行動化していると指摘している。

ではなぜ現代の子どもたちは、このようにたやすく他者への過剰な攻撃性を露呈するようになったのであろうか。

例えば大淵（2003）は前述のバスジャック犯の青年に関して「彼は心の中に誇大的自己イメージを持っていたようだが、人づきあいが下手な彼は、むしろ、周りの人から無視されたり、見下されるといったことがあり、中学・高校生活を通じてその歪んだ自尊心は傷つけられることが多かったと思われる」と述べている。また和田（2000）は現代の子どもたちの過剰な攻撃性を説明する概念として、H.Kohutの自己愛憤怒を用いて「自己がしっかりしていないと、この憤怒によって自分がばらばらになってしまう。そのため、後先のことが考えられないし、相手に容赦のない攻撃をしてしまう。攻撃しても、自分の自己愛が癒されるわけではないので、攻撃性は執拗な、また纏綿としたものになる。切れる子どもや、ストーカー行為を説明するのに役立つ概念といえる」としている。

ここで両者が共通して語っているのは、「自己愛の増大あるいは歪みと攻撃性の正の関係」についてと言えるであろう。現代の子どもたちは、想像以上に誇大な自己愛や、独りよがりでの社会的には許容されない歪曲した自己愛を形成している可能性があり、ひとたびそれを傷つけられたと感じたとき、その怒りはたやすく他者への攻撃性に転嫁する傾向にあるのかもしれない。

確かにこれまでの自己愛の研究から、自己愛傾向の強いものほど、自己本位で競争的であり、攻撃性が高く、共感性に乏しいことなどが明らかにされている（Asper,K.2001）。しかし自己愛や攻撃性は、本来、人間にとって不可欠な特徴とも言える。たとえばJuvonen,J.ら（2000）は孤独感や低い自己価値は他者からのいじめや心理的な不適応の要因となるとしている。また大淵（2000）は人間の攻撃性を社会的葛藤の解決方略として肯定的に位置づけている。つまり適度な自己愛や攻撃性は、人間が他者と共に生きる社会生活上、不可欠なものとも言えるであろう。しかし上記のように、現代の子どもたちはあまりにも肥大化した自己愛にあふれ、それが傷つけられたときには、過剰な攻撃性を早急に示すことが特徴と言えるであろう。このような近年の青年期の自己愛傾向について、小塩（1998）は自尊感情との関係で検討し、自己愛と自尊感情は全体としては正の相関関係があるものの、その下位尺度のうち、自己愛の特徴とも言える「注目・賞賛欲求」は自尊感情とは無相関であることを指摘している。また、Raskin,R.ら（1991）はnarcissism, self-esteem, defensive self-enhancementの関係について検討し、自尊感情を社会的な基盤を持ったdefensiveなものと、他者を意識しないnondefensiveな要素にわけて、ナルシシズムは全体として自尊感情と正の相関があるものの、とりわけnondefensiveな自尊感情の下位尺度である虚栄心、自己充満感や権威性と正の相関があるとしている。あるいはCampbellら（2002）は自己愛をナルシシズムとして概念化した場合と自尊感情とした場合に分類し、後者の概念とした場合の方が、健全な対人関係を築くことができると示唆している。

次に自尊感情の働きに焦点を当ててみると、徳田（1987）は、自尊感情と類似の概念である自己評価を「自己受容、自己関心、自己感情、自己価値感を包括した概念」と定義した上で、良好

な両親の養育態度によって個人の自己評価は高まり、ほどよい対人関係を築くことができるとしている。臨床的には、悲惨な家族歴を持った非行少年らの矯正機関での職員による家族的な対応が彼らの立ち直りに対して、功を奏するという報告も為されている（三好,2002）。また両親の養育態度について宮下(1991)は青年のナルシシズム傾向と親の養育態度の関係について研究し、冷ややかで厳格な家庭環境や両親の否定的な養育態度が自己愛的人格傾向を助長することを示唆している。

以上をまとめてみると、青年期に特によく見受けられる過剰な攻撃性は、彼らの自己愛と正の相関関係にあり、彼らは自らの自己愛が傷つけられたと感じた場合、「切れ」やすく、自己愛憤怒と化した激しい怒りは、他者への攻撃に向かいやすい傾向がある。しかし自己愛の下位尺度として、「自尊感情」を分離させて考えた場合、自尊感情は攻撃性に負の相関を示す要因となる可能性を含んでいる。次に「自尊感情」を中心に考えると、自尊感情の発達には、家族関係の良好な展開が必要であるということがこれまで多くの研究者によって示唆されている。

したがってこれらを一連の流れとしてとらえるならば、過剰な攻撃性はプリミティブな自己愛によって助長されるが、自己愛の一部あるいは社会性の強い自尊感情の高まりによって抑制される。また自尊感情を高めるためには良好な家族関係が必要であるという仮説を立てることができるであろう。しかし「攻撃性」「自己愛」「自尊感情」「家族関係」は相互に密接な関連があると考えられるものの、上記の仮説のようにこれら4つの特性を同時に関連づけた総括的な研究はこれまでほとんど為されていない。また既存の研究は調査研究が大部分であり、その知見を臨床的に応用し、4つの特性と関連する事例を検討し具体的な援助のあり方を導いたものもあまり見受けられない。

心理臨床学では研究の成果を事例に反映し臨床的に応用することこそ肝要と考えられる。そこで本研究ではこれまでそれぞれ個別に研究されてきた「攻撃性」「自己愛」「自尊感情」「家族関係」をすべて関連させた上記の仮説を調査研究によって検証することを第一の目的とする。またその結果をもとに、事例への考察を加えながら過剰な攻撃性を示す青年に対する有効な援助の視点を見出すことを第2の目的としたい。

Ⅱ. 調査研究

1. 調査対象

公立中学校1～3年生、計493名（1年176名、2年136名3年181名、男子247名、女子246名）、同じく公立高校1～3年生、計464名（1年169名、2年133名、3年162名、男子199名、女子265名）、2校の大学生、計190名（A国立大学学部生(54名)、B私立大学学部生（136名））の合計1,147名を対象とした。

2. 測定尺度

(1)自尊感情尺度(SE-I) Janis & Field(1959)によって作成された自尊感情尺度をもとに遠藤・安藤・冷川・井上(1974)によって作成された自尊感情尺度(SE-I; 23項目)のうち、18項目を用いた。回答方式は4件法とした。Janis & Field(1959)は自尊感情を社会的な適応の感情としている

点で、自尊感情を対人関係の中での自己のイメージとした本研究の位置づけと合致していると考えた。

(2)攻撃性尺度 安藤ら(1999)による日本版Buss-perry攻撃性質問紙(BAQ)のうち23項目を選択した。攻撃性を多くの側面からなる複合的な特性(大淵・北村・織田・市原,1994)と捉える視点で作成されたこの質問紙は、社会性の獲得途上にある青年期対象の攻撃性に関する質問紙として適当であると考えたため、本調査に採用した。

(3)自己愛尺度 大石ら(1987)によって日本語化されたNPI(自己愛人格目録)の29項目を選択し、4件法で回答を求めた。

(4)家族イメージ尺度 家族イメージを測定する尺度として、茂木(1994)が、ビーバーズら(Beavers,Hanson&Halgus, 1985)が開発した尺度であるSFI(Self-Report Family Inventory)から健康因子を中心にして作成した家族健康尺度を元に本研究用に作成した。

3. 調査手続き

2001年6月、予備調査のため、削除前の全質問項目を当該の中学校と高校の各20名を対象に実施し、質問の内容についての意見を自由記述及び筆者の聞き取りによって求めた。その結果に基づき、本調査のための質問紙を作成した。2001年7月、中学校と高校で、無記名の質問紙法による学級単位の一斉調査を行った。実施は管理職を通して学級担任に依頼した。また、A国立大学は2001年7月、授業内に授業担当者が無記名の質問紙法で実施した。B私立大学は2001年9月に同様の手続きで実施した。

Ⅲ. 調査研究の結果と考察

1. 各尺度の分析

(1) 自尊感情尺度(SE-I)の分析
SE-Iのうち本研究に選択された18項目について男女込みで因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。固有値1以上を条件に固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から、3因子解が妥当であると判断した。さらに因子負荷量の低い7項目を除外した11項目で、再度因子分析を行った(TABLE 1)。

TABLE 1 自尊感情に関する因子分析(バリマックス回転後)

	F1	F2	F3	共通性
10 あなたは、人前を気にしたり、はずかしさをおぼえることがありますか ($\alpha=.7230$)	0.659	0.240	-0.064	0.496
9 あなたは、他の人々が集まっている部屋に自分一人が入っていくような場合、遠慮や不安を感じますか	0.655	0.198	-0.059	0.472
11 あなたは、クラスや自分と同年代の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったりしますか	0.644	0.189	-0.100	0.461
12 絶対勝とうと思っている時、あなたは緊張したりあがったりしますか	0.421	0.211	-0.052	0.224
16 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか ($\alpha=.7799$)	0.261	0.781	0.027	0.679
18 あなたの友人や知り合いがあなたのことをよく思っていないかもしれないと考えるとき、あなたはそれを気にしますか	0.309	0.655	-0.001	0.524
17 自分の意見を認めない人々を説得している時、あなたは自分が相手にどのように思われているか気になりますか	0.174	0.610	-0.077	0.409
8 あなたは、他の人々とのくらいやっているかどうかについて気にしますか	0.408	0.462	-0.021	0.381
2 あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか ($\alpha=.7067$)	-0.100	-0.042	0.748	0.571
3 自分の知っている人々が、いつかはあなたを尊敬の目を持って見る日がくると信じていますか	0.006	0.042	0.655	0.431
6 あなたは自分のいろいろの能力について自信を持っていますか	-0.100	-0.062	0.588	0.359
2乗和	1.836	1.810	1.361	
寄与率(%)	16.688	16.450	12.373	45.512

因子負荷量の大きい項目でみると、第1因子は、「あなたは、人前を気にしたり、はずかしさをおぼえることがありますか」、「あなたは、他の人々が集まっている部屋に自分一人が入っていくような場合、遠慮や不安を感じますか」などからなり、他者に対しての自分の振舞い方について気にかけているかどうかを測定しているので、「自意識過剰」因子と命名した。第2因子は、「他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかについて、あなたは気にしますか」、「あなたは友

人や知り合いがあなたのことをよく思っていないかもしれないと考えるとき、あなたはそのことを気にしますか」など、井上（1982）、小塩（1994）と同様、他者からの評価を気にする因子であると考えられるので、「評価過敏」因子とした。第3因子は、「あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか」などからなり、先行研究同様に「自己価値」因子と命名した。

(2) 攻撃性尺度の分析 日本版Buss-perry攻撃性質問紙（BAQ）で、予備調査の結果削除された1項目を除く23項目について(1)と同様の手続きで因子分析を行った。さらに因子負荷量の低い3因子を除外した20項目で、再度因子分析を行った（TABLE 2）。この結果、前述の安藤ら（1999）の分析結果と同一の4因子を抽出した。因子負荷量の大きい項目で見ると、第1因子は「私をきらっている人は結構いると思います」「きらいな人に出会うことが多い方です」などからなり、他者に対する否定的な認知をあらわしているの「敵意」因子と名づけた。第2因子は「いらいらしていると、すぐに顔に出るほうです」「ちょっとした言い合いでも、声が大きくなります」など他者への攻撃的な感情の表出を表しているの「怒り」因子とした。次の第3因子は「なぐられたら、なぐり返すと思

います」「からかわれたら、相手を殴りたくなるかもしれません」など他者への物理的な攻撃への意志や行動を示しているの「身体的攻撃」因子と命名した。第4因子は「友だちの意見に賛成できないときは、はっきりいいます」「自分の権利は遠慮しないで主張するほうです」など、主に言葉を攻撃の手段としていることから、第3因子に対比させて「言語的攻撃」因子とした。

TABLE 2 攻撃性に関する因子分析（バリマックス回転後）

	F1	F2	F3	F4	共通性
(15) 私をきらっている人は結構いると思います (α=.7191)	0.707	0.191	0.060	0.045	0.541
(22) 友人の中には、私のことを嫌うかもしれない人があると思います	0.601	0.183	-0.017	-0.013	0.395
(7) 嫌で人から笑われているように思うことがあります	0.584	0.293	-0.052	-0.090	0.438
(10) 私を苦しめようと思っている人はいないと思います	-0.530	0.058	-0.152	0.088	0.315
(19) きらいな人に出会うことが多いほうです	0.415	0.092	-0.124	0.049	0.199
(18) 人からばかにされたり、いじわるされたことはほとんどありません	-0.404	0.102	-0.091	0.059	0.185
(6) かつとなることをおさえるのがむずかしいときがあります (α=.7278)	0.084	0.624	0.192	0.180	0.466
(8) ばかにされると、すぐにかつとなるほうです	0.150	0.541	0.239	0.170	0.401
(13) たいした理由もなくかつとなることがあります	0.205	0.536	0.211	0.014	0.373
(11) いらいらしていると、すぐに顔に出るほうです	-0.032	0.519	0.037	0.080	0.278
(4) ちょっとした言い合いでも、声が大きくなります	0.046	0.417	0.085	0.397	0.340
(23) かつとなって、物をこわしたくなることがあります	0.216	0.411	0.367	-0.074	0.356
(20) なぐられたら、なぐり返すと思います (α=.7429)	0.075	0.152	0.717	0.209	0.587
(5) 相手が先に手を出したとしても、やりかえしません	0.020	-0.082	-0.573	-0.017	0.336
(14) からかわれたら、相手をなぐりたくなかもれません	0.243	0.298	0.552	0.121	0.468
(17) 人をなぐりたいという気持ちになることがあります	0.347	0.280	0.547	0.122	0.512
(21) 自分の権利はえんりよしないで主張するほうです (α=.6463)	-0.080	0.091	0.083	0.634	0.423
(9) 友達の見解に賛成できないときは、はっきりいいます	-0.039	0.072	0.028	0.599	0.366
(3) 誰かにいやなことをされたら、いやだとはっきり言います	-0.138	-0.033	0.111	0.565	0.352
(1) 意見が対立したときは、議論しないと気がすまなくなります	0.133	0.209	0.025	0.450	0.265
2乗和	2.169	2.014	1.803	1.611	
*は逆転項目					
寄与率(%)	10.845	10.072	9.014	8.055	37.986

(3) 自己愛尺度（NPI）の分析 選択した29項目について、上と同様に因子分析を行い、2因子解が妥当であると判断した。十分な負荷量の見られなかった9項目を除き、残り20項目で再度因子分析を行った（TABLE 3）。その結果各因子は以下のように解釈された。まず第1因子は12項目からなり、「私はよいリーダーになれる自信があります」や「私は人より優秀な人間であると思います」「私は才能のある人間だと思

TABLE 3 自己愛に関する因子分析（バリマックス回転後）

	F1	F2	共通性
9 私はよいリーダーになれる自信があります (α=.8680)	0.771	0.167	0.622
29 私は生まれつき、リーダーとしての才能を持っています	0.762	0.131	0.598
26 私はもとよりリーダーになるのが性格にあっています	0.709	0.153	0.527
12 私は人より優秀な人間だと思います	0.637	0.191	0.442
8 私は才能のある人間であると思います	0.585	0.232	0.397
10 私は自分の意見をはっきりいうほうです	0.554	0.127	0.323
28 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれます	0.530	0.233	0.335
14 私は自分で責任を持って決断するというのが好きです	0.523	0.186	0.308
1 まわりの人はいない私の力を助けてくれます	0.498	0.221	0.297
13 私は人の気持ちをずばり読み取る力があります	0.446	0.228	0.251
4 私は、注目される人間をしばらくは気に入るようになります	0.429	0.185	0.218
5 私はどんなことでも、あまりえんりよしないで自分の好きなように振る舞えます	0.429	0.062	0.188
24 私は、注目の的になってみたいという気持ちがあります (α=.7782)	0.300	0.671	0.540
21 私は人からほめられることを望んでいます	0.137	0.635	0.422
7 どちらかといえば、私は注目される人間になりたいです	0.347	0.570	0.445
22 私はうらやましがり屋だと思います	-0.127	0.518	0.284
19 人が私にいろいろしてくれのを期待しています	0.166	0.453	0.233
23 私は誰を見るのが好きです	0.214	0.452	0.251
3 私は強い人間だと思われたいです	0.239	0.450	0.259
27 私はえらい人だといわれる人間になりたいです	0.292	0.426	0.267
2乗和	4.563	2.643	
寄与率(%)	22.817	13.217	36.034

なっている。この因子はすべて自らの視線を自己自身に向けそれを賛美し、自己に対する自信に

満ち溢れ、自己主張的・自己中心的であることから「対自己愛」因子と命名した。次の第2因子は8項目からなっている。「私には、注目のまとなってみたいという気持ちがあります」「私は人からほめられることを望んでいます」など自らの価値を他者に認めさせ、注目、賞賛されたいという強い欲求があらわされている。したがって自らの視線を自己自身のみならず他者にも向けていることから「対他自己愛」因子と命名した。

(4) 家族イメージ尺度の分析 項目13は中学生で削除されたため、これを除く12項目で同様に因子分析を行った。その結果、先の茂木の予測どおり1因子に収束し、またそれぞれの項目の因子負荷量は.57以上と高いものであった。1因子とまとまったので、尺度名の「家族イメージ」を因子名として採用した。

なお、自尊感情、攻撃性、自己愛、家族イメージのそれぞれで、各因子の α 係数は.71～.78,.65～.74,.87と.78,.92で、一応の内的一貫性が認められた。

TABLE 4 家族イメージに関する因子

	共通性	
12 私の家族は幸せである時が多いと思います ($\alpha = .920$)	0.754	0.568
5 家族の誰もが家族から愛されています	0.752	0.565
2 両親は理解があります	0.749	0.562
7 私の家族の未来は明るいです	0.743	0.552
3 私の家族は親密であるが、お互いの個性は認め合っています	0.739	0.545
9 私の家族では、悲しみ、幸せ、怒り、愛、興奮、恐怖など、どんな感情でも受け入れることができます	0.727	0.529
8 私の家族は、みんなで問題を解決することがうまいほうです	0.725	0.526
10 私の家族はお互いの話をよく聞かれます	0.720	0.518
1 私の家族は、お互いの気持ちを気にかけています	0.686	0.471
11 うです	0.630	0.396
4 私の家族はお互いの友人を快く受け入れます	0.598	0.357
6 家にいる時が、一番楽しいです	0.576	0.331
	2乗和	5.920
	寄与率(%)	49.335

2. 攻撃性と他の尺度との関係

(1) 攻撃性に影響を及ぼす要因 攻撃性に対する自尊感情、自己愛、家族イメージの影響を明らかにするために、自尊感情の3因子、自己愛の2因子、家族イメージ1因子と年齢を説明変数とし、攻撃性を基準変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（TABLE 5）。尚、年齢を説明変数として取り上げたのは、青年期が社会性を獲得していく時期であり、加齢によって攻撃性の差があると考えたからである。標準偏回帰係数の相対的な大きさから、攻撃性全体に関して、負の影響を与えているのは「家族イメージ」「自己価値」と「年齢」であった。

これらの抑制因子とは反対に、攻撃性に正の影響を与えたのは「対他自己愛」「対自己愛」そして「評価過敏」因子であった。

次に、攻撃性の各因子で見たときに、「自己価値」と「家族イメージ」が、「怒り」に対して抑制的に作用していた。大淵（1984）・Bussら（1992）は、「怒り」はすべての攻撃性の仲介変数をなす情緒的成分であり、この「怒り」の抑制が攻撃的な認知や行動に繋がると考えられる」と述べている。したがって「自己価値」と「家族イメージ」が「怒り」という攻撃性の情緒面を抑制し、その結果として攻撃性の認知や行動が抑制されると推測できよう。

第2に、「家族イメージ」「自己価値」は、言語的攻撃では有意な影響が認められなかった。このことは言語攻撃性が日常生活に必要な社会的に承認される攻撃行動であることからきているのであろう。また性に関して身体的攻撃で男子が有意に高い点は、Frodiら（1977）の「暴力など身体的な攻撃反応は男性に多く見られる。反対に、人を非難したり、皮肉を言ったりする言語的攻撃は女性に多い」という結果と一致し、一般に男性が女性よりも攻撃行動として身体的な手段に訴えやすいことがあらわされているのであろう。

TABLE 5 攻撃性に影響を及ぼす要因（重回帰分析）

	攻撃性全体			敵意			怒り			身体的攻撃			言語的攻撃		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
自意識過剰				.075	.122		.106						-.106		-.134
評価過敏	.214	.197	.220	.342	.326	.385	.147	.191	.175						
自己価値	-.134		-.179	-.132	-.164	-.113	-.141		-.189		-.106			.136	
対自己愛	.164		.217	-.090		-.125	.163		.186				.439	.446	.419
対他自己愛	.227	.245	.208	.105		.117	.205	.228	.210	.176	.247	.162	.104		.100
家族イメージ	-.234	-.200	-.241	-.243	-.248	-.225	-.139	-.130	-.150	-.235	-.179	-.249			
学年	-.108			-.137	-.187	-.132	-.195			-.112		-.143			
R	.436	.406	.458	.560	.503	.600	.393	.362	.379	.283	.271	.313	.527	.541	.521
R ²	.190	.164	.210	.314	.253	.360	.155	.131	.144	.080	.074	.098	.277	.292	.272

***p<.001 **p<.01 *p<.05

(2) 攻撃性とタイプ・性による比較 上記(1)の重回帰分析の結果から、攻撃性の抑制に関して「自己価値」と「家族イメージ」が、促進に関しては「自己愛」が相対的に強い影響を及ぼしていることがわかった。次にこの中から、「自己価値」と「自己愛」によって個人を分類し、攻撃性の強さを比較した。「自己価値」と「自己愛」の得点を平均値を基準に高い群と低い群を組み合わせ、自己タイプ4群（TABLE7）を作成し、自己タイプ4群と性による攻撃性の比較を行った（TABLE6）。その結果、攻撃性全体に関してはタイプによる主効果が認められた($F(3,985)=11.10$, $P<.001$)。多重比較(LSD法)の結果、第3群の攻撃性の得点が有意に高く、続いて4群、1群、2群の順でこれらにも有意差が認められた。すなわち第3群である「自己愛が高く自己価値が低いタイプ」の青年の攻撃性が最も高く、次に「自己愛も自己価値も高いタイプ」の青年が続いていることが明らかになった。適度な攻撃性を持つことは社会生活をおくる上で重要であり、そのためには自己愛と自己価値の両者が同時に高いことの必要性が示されたと言える。

TABLE 7 自己愛2群と自尊感情2群によるタイプ

	自尊感情	低群	高群
自己愛			
低群		1群	2群
高群		3群	4群

TABLE 6 攻撃性とタイプ（自己価値・自己愛）×性による比較（平均値（標準偏差））

	タイプ				性		タイプ別	F値	交互作用	比較
	1.低低群	2.高低群	3.低・高群	4.高・高群	男子	女子				
攻撃性全体	2.53(.47)	2.41(.40)	2.71(.51)	2.61(.44)	2.56(.46)	2.57(.47)	11.10***	n.s.	n.s.	3>4>1>2
敵意	2.70(.63)	2.41(.64)	2.67(.63)	2.41(.56)	2.53(.60)	2.58(.65)	16.32***	n.s.	n.s.	1=3>4=2
怒り	2.48(.69)	2.28(.61)	2.70(.70)	2.59(.66)	2.43(.68)	2.60(.67)	9.64***	8.44**	n.s.	3=4>1>2 女>男
身体的攻撃	2.60(.82)	2.52(.77)	2.77(.81)	2.68(.83)	2.80(.78)	2.51(.83)	3.48*	25.79***	n.s.	3=4>1=2 男>女
言語的攻撃	2.27(.57)	2.50(.59)	2.71(.58)	2.88(.59)	2.58(.60)	2.57(.65)	70.88***	n.s.	n.s.	4>3>2>1

***p<.001 **p<.01 *p<.05

また攻撃性の各因子においても自己タイプによる主効果が認められた（「敵意」 $F(3,985)=16.32$, $P<.001$; 「怒り」 $F(3,985)=9.64$, $P<.001$; 「身体的攻撃」 $F(3,985)=3.48$, $P<.05$; 「言語的攻撃」 $F(3,985)=70.88$, $P<.001$;）。全般的に見て攻撃性の各因子で、攻撃性全体と同様に第3群と第4群が高い結果であった。ただし「言語的攻撃」では4群が3群より有意に高かった。第4群すなわち「自己愛が高く自己価値が高い」青年たちは、他の群に比べ適度な攻撃性を保持しながらも、社会的に認められる言語的攻撃はもっとも高い傾向にあることが明らかになった。

IV. 総合考察

1. 自己愛と攻撃性

「自己愛」の概念はフロイト（1969）によってリビドーの自己への吸収として、病的に捉えられていた時代を経て、現在ではコフト（1995）によって唱えられている「正常な精神発達に認められるもの」という肯定的なものへと変遷してきている。

しかしその反面、現代では「自己愛」があまりにも肯定的に捉えられすぎる傾向を危惧する面もある。たとえば小此木（1987）は「自己愛パーソナリティ」や「1.5世代」として、「自己愛」の障害が特に青年期に顕著であることを指摘している。丸田（1992）は、自己愛人格障害など「自己愛」の病理の特徴として、誇大性、賞讃されたい欲求、共感の欠如を強調し、その成就を阻むものに対する怒りや拒絶的な感情の存在を取り上げている。

たとえば、前述の「酒鬼薔薇事件」をこの視点で考えてみると、加害青年の他者への異常な攻撃性を「自己愛」のゆがんだ発散の手段とみなすこともできるであろう。しかしこのような深刻な犯罪のみならず、これまで報告されている事例は、これら「自己愛」の問題が日常の学校や家庭においてさまざまな形で攻撃性と関連していることを示している（福島、1992；田中、1996）。このことは本研究における「自己愛」の2因子が攻撃性に正の影響を与えているという結果とも一致している。

筆者が扱った事例にも、いじめや不登校、家庭内暴力などのきっかけが、この「自己愛」の傷つきや破綻と関連するものは数多い。例えば中学2年生のある女子は「教師にみんなの前で叱られ、どんな風に見られているかと思うと、怖くてもう学校にいけない。どうしてみんなの前で自分が叱られなければならないのか。」と叱責した教師を憎んでいた。高校1年のある男子は「部活動内の対人関係のもめごとで、自分はまったく悪くないのに、顧問から試合出場停止処分を受けた。『どうして、自分だけが』って思う。」と5歳から生きがいとして続けていたその競技をあっさりとやめ、その後、残った部員への傷害事件を起こし退学となった。両事例ともに、他者からの低い評価を敏感に感じとり「自己愛」が深く傷つき、その傷つきが、他者への攻撃性へと変貌している。ある中学1年のいじめの加害者は「小学校の時、自分がわけもなく傷つけられたから、今度は自分が誰でもいいからいじめてもいいはず。自分が最初に傷つけられたのだから、誰をいじめようと自分は間違っていない」と言い張った。また、母親に暴力を振るい続けたある17歳の男子は「同級生からダサイ顔といつも言われた。自分を醜く生んだ母親は殴られて当然だ」と筆者に訴えた。このように「自己愛」を傷つけられた若者の中には、悪いのは自分を傷つけた他者であるとし、彼らへの攻撃を正当化しているものも少なくない。

2. 自己愛と自尊感情 (self-esteem)

DSM-IV(1995)に見られる自己愛人格障害の様式では、自己愛の病的な側面として「共感の欠如」や「尊大で傲慢な行動、または態度」など、他者との関係性の不在や他者への心配りの欠如があげられている。換言すれば、自己愛が健全に発達するためには、他者との肯定的な関係性が必要であると言えるだろう。この視点に立って、筆者が健全な「自己愛」と関連の深い概念とし

て本研究で取り上げたのが「自尊感情 (self-esteem)」である。なぜなら、この「自尊感情 (self-esteem)」は、生育史の中で育んできた自己愛的な感情や、自らに対する肯定的な感情を、他者との関係の中で再点検、再評価することや、現実の社会生活の中での自らの立場を正しく認識することを前提とした概念だからである (井上, 1992)。つまり「自己愛」に「他者の存在」という対象を加えた時、自己誇大感や共感性の欠如を特徴とする未熟な自己愛が成長・変容し、その一部が他者への配慮や思いやりを含んだ「自尊感情」に発展する可能性が生まれるのである。言い換えれば、我々が持つ過剰な攻撃性や、他者への憎しみなどのネガティブな感情をほどよいものに変容させるには、他者との関係性を前提とした「自尊感情」を高めることが必要であり、このことが成熟した自己愛を形成していくと考えられる。

かつて筆者は「いじめを考える」をテーマとした中学校1～3年生の授業を実施したことがあるが、その授業の中心テーマは「誰でも他者をいじめたいと思うときはあるだろう。でも、実際にいじめないのはどうしてなのだろうか。」というものだった。その場で出された意見や授業後のアンケートで、予想以上の数を占め筆者の印象に残った内容は「部活の後輩や先生にいじめっ子と思われたくない。」とか「友だちをいじめるようないやな自分を、親友に見せたくないから。」「自分へのみんなの信頼がなくなるから。」というような「他者から認められる自分でいたい」という気持ちを表すものであった。本研究では攻撃性の抑制要因として「自己価値」が抽出されていることによってこの見方が支持されたと言えるであろう。

3. 「重要な他者」としての家族機能

酒鬼薔薇事件の加害少年について山中(2001b)は「私の考えでは、こうした事態が起こってくるのは、少年たちが、その生活史の過程で、ちゃんとした愛着 (attachment) を経過していなくて、かつ、もっと大切なことは、私流の言葉で言えば、親や教師といった彼を包む大人との間に、こころの深奥に触れる『人格の切り結び』を経験していなくて、真の意味で、『こころ奮える』体験をしていないから、なのである。」としている。またSullivan,H.(1953)は、「自尊感情」の形成に重要な役割を果たす「重要な他者」を「母をはじめとする養育者」としている。Klein,M.(1936)は「『妄想・分裂態勢』にある赤ん坊は、良い部分対象である『母親対象』との体験を繰り返すことによって、自らの“死の本能＝他者への攻撃性”を次第に緩和させることができる」としている。クラインはまた「『妄想・分裂態勢』にある赤ん坊が、悪い部分対象＝悪い母親対象との体験しか繰り返すことができない場合、その『悪い乳房』への攻撃という破壊的な行為を繰り返す」とも語っている。つまり「自己愛」の発達や「自尊感情」の形成には、乳児期に体験する「内的対象＝母親対象」との適切な養育関係が不可欠なのであり、もしその対象と適切な関係が保持できなかった場合、その不全感が次にはその対象への攻撃衝動に転嫁することが推察されるのである。このようなことから、子どもたちの過剰な攻撃性の背後には、「母親対象」との継続的で安定した体験の不足や欠如が伺える。これは本研究における良好な「家族イメージ」が攻撃性に抑制的に作用するという結果と一致している。

4. 援助の視点

過剰な攻撃性や衝動性を持った子どもたちへの援助について、この「母親対象」との体験を考

慮に入れながら具体的に考えてみたい。このことを考える上で大切な点は、この「悪い母親対象」との体験は、乳幼児期にすでに与えられてしまったものであり、もはや修正が不可能なのかということである。Mitchell (1990) は、「たとえ生育歴に問題のある青年期の生徒でも、教師・カウンセラーなどの、生徒にとって身近で具体的な他者との間の揺るぎない信頼感の構築によって、更正の高い可能性がある」と述べている。そして乳児期をはじめとして生育歴の中のある期間に「母親対象」と適切な関係を経験できなかった人であっても、この「妄想・分裂態勢」を生き直すこと、そこで「育ち直し」として「母親対象」との関係を良好なものに再生することが重要な援助の要諦となることを示唆している。

このように考えると彼らに対応するカウンセラーや教師など援助者は、彼らが赤ん坊としてもう一度育ち直す過程の伴走者、「母親対象」として関わるのが肝要であろう。Winnicott, D. (1971) は「ひとりの赤ん坊は存在しない。ひとつの赤ん坊—母親関係だけしか存在しない」と語っている。彼らがこれまで持っていた否定的な家族関係をやり直し、これまでの関係性の視点を肯定的なものに転換すること、この受容的な「疑似家族関係」を体験することこそが、それまで育たなかったであろう彼らの「自尊感情」を高め、ひいてはそれが攻撃性の抑制に影響を与えるものと考えられる。

最後に彼らと関係を結ぶための場の重要性について述べておきたい。このような過剰な攻撃性を持つに至った青年たちが育ち直しを試みる時、彼らはもう一度生まれたての赤ん坊のような状態に立ち返ることが必要であるし、またカウンセラーは彼らをまず赤ん坊のように受け止めることから始めることが肝要となる。しかしその「赤ん坊のような自分」とは「攻撃的で否定的な自分、他者に受け入れられない自らの影」である可能性が高い。したがってそのような自分を表現するにはしっかりと守られた「非日常的な場」が必要である。それは何を表現しても許されると同時に、自分でも止められないようなプリミティブな内面が現れたときにそれを押しとどめる力を兼ね備えた場でもなければならぬだろう。そのような安定した構造に保護されてこそ彼らははじめてそれまで迫害者となってきた他者を、自らの援助者として受け入れることができるであろう。つまり外界との境界を設定するとともに、自らの内面を安定させる枠を持つ「育ち直しの器としての居場所」、具体的には各相談機関が設置している構造化されたカウンセリングルームや近年医療機関で急激に整備されつつある院内の心理療法室などが、彼らの援助には必須と考えられるのである。

V. 結 論

本研究は「攻撃性」と「自己愛」「自尊感情」「家族イメージ」の関係を明らかにすることを目的としてきた。またこれらに関連する過去の事例を踏まえて過剰な攻撃性を示す青年への援助の方法を考えた。そのため、1,147名の青年たちへの質問紙による調査研究を実施し、以下の結果を得た。まず「自己愛」は「攻撃性」に正の相関があるが、「自己愛」と類似の概念である「自尊感情」は「攻撃性」を抑制する要因となった。次に「自尊感情」に対しては「肯定的な家族イメージ」が重要な関係を持っていることが示された。以上より、過剰な攻撃性を示す青年たちには、受容的な家族関係と類似であるようなカウンセラーをはじめとする他者との肯定的な経験が

重要であることが示唆された。自らを受け入れ、許容してくれる他者との暖かい経験によって、彼らの過剰な「攻撃性」は抑制され、「自尊感情」が高められる可能性があると考えられるからである。

また今後の課題としては、多層的で複雑な「攻撃性」に関連する他の特徴も考慮した発展的な研究と、この研究の知見を生かした事例の検討を重ねることが必要と考えられる。

文 献

- American psychiatric Association 1995 DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 p.230-231 医学書院。
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 1999 日本版Buss-perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性,信頼性の検討 日本心理学研究 70-5 384-392
- 朝日新聞 2003.08.23 文部科学省2002年度問題行動調査より
- Asper,K. 2001 老松克博訳 自己愛障害の臨床—見捨てられと自己疎外 創元社
- Beavers,W.R.,Hanason,R.B.,&Halgus,Y.F. 1985 Commentary: The Beavers systems approach to family assessment.Family Process,24,398-405
- Buss,A.H. and Perry,M. 1992 The Aggression Questionnaire. Journal of Personality and Social Psychology 63-3,452-459
- Cambell,W.K.,Foster,C.A.,&Finkel,E.J. 2002 Does self-love lead to love for others?A story of narcissistic game playing.Jornal of Personality and Social Psychology,83,340-354.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteemの研究 九州大学教育学部門紀要, 18, 53-65
- Freud,S. 懸田克弥訳 1969「ナルシズム入門」フロイト著作集5 人文書院 (Freud, S. 1914 Zur Einführung des Narziß mus.)
- Frodi, A. Macaulay, J. & Thome, P. R. 1977 Are women always less aggressive than men?:a review of experimental literature. Psychological Bulletin 84, 634-660
- 福島 章 1992 青年期の心 103-126 講談社現代新書
- 井上祥治 1992 セルフ・エスティームの測定法とその応用 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編)セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- Janis, I. L. & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds., Personality and persuasibility. New Haven: Yale University Press.
- Juvonenn,J., Nishina,A. & Graham,S. 2000 Peer Harassment,Psychological Adjustment and School Functioning in Early Adolescence Journal of Educational Psychology Vol.92,No.2,349-359
- 河上亮一 1999 学校崩壊 草思社
- Klein,M. 西園昌久・牛島定信責任編集 1983 メラニー・クライン著作集3 愛、罪そして償い — 離乳— 誠信書房 (Klein, M. 1936 The Writings of Melanie Klein Vol.3 LOVE,GUILT AND REPARATION AND OTHER WORKS(1933-1945) 'Weaning' ;The Hogarth Press Ltd.,London)
- Kohut,H. 1995 自己の修復 本城秀次・笠原 嘉監訳 87-102 みすず書房(Kohut, H. 1977 The Restoration of the Self. New York:International Universities Press.)
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究 46,280-290
- 丸田俊彦 1992 「コフト理論とその周辺」 岩崎学術出版
- Mitchell, C. E. 1990 Development or restoration of trust in Interpersonal relations during adolescence and beyond. Adolescence, 25, 847-854.
- 宮下一博 1991 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究 39, 455-460

- 三好洋子 2002 子どもたちと暮らして思うことーグループホームからの報告ー臨床心理学 2 巻 2 号
175-182 金剛出版
- 茂木千明 1994 家族機能査定に関する研究 家族円環モデルと日本語版FACESⅢの関連性について
家族心理学研究 8-2,95-108
- 小此木啓吾 1987 「一・五の時代」 ちくまライブラリー 4
- 大淵憲一・小倉左知男 1984 怒りの経験(1):Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況
犯罪心理学研究 22, 15-35
- 大淵憲一・北村俊則・織田信男・市原真記 1994 攻撃性の自己評定法:文献展望 季刊 精神科診
断学 5(4); 443-455
- 大淵憲一 2000 攻撃と暴力 なぜ人は傷つけるのか p.44-45 丸善ライブラリー
- 大淵憲一 2003 満たされない自己愛 p.199 ちくま新書
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 自己愛的人格の基礎的研究(1)ー自己愛的人格目録の信頼性
と妥当性についてー 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535
- Raskin, R., Novacek, j. & Hogan, R. 1991 Narcissism, Self-Esteem, and Defensive Self-Enhancement. Journal of
personality 59-1, 19-38
- 芹沢俊介 2003 男児誘拐殺人事件 京都新聞2003.7.18
- Sullivan, H. S. 1953 THE INTERPERSONAL THEORY OF PSYCHIATRY 245-262 W. W. NORTON &
COMPANY・INC.
- 滝川一廣 2001 「こころ」はどこで壊れるか 洋泉社
- 田中信市 1996 家庭内暴力ー嵐をのりこえるためにー サイエンス社
- 徳田完二 1987 青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究 58-1、8-13
- 山中康裕(a)2001 闇からのメッセージ 山中康裕著作集 1 p.263 岩崎学術出版社
- 山中康裕(b)2001 闇からのメッセージ 山中康裕著作集 1 p.265 岩崎学術出版社
- 和田秀樹・二木啓孝 2000 殺人心理 アスキー
- Winnicott, D. W. 1971 Playing and Reality. P.13 Tavistock Publication.

(博士後期課程 2 回生, 臨床心理実践学講座)

Supporting adolescents exhibiting excessive aggression

NAKAGAWA Mihoko

The purposes of this paper are 1) to comprehensively investigate the relationships among aggression, narcissism, self-esteem and family-image in adolescence and 2) to propose a way of supporting adolescents who have excessive aggression. Questionnaires assessing the strength of aggression, narcissistic personality, self-esteem, and family-image were anonymously completed by 1,147 students. By analyzing their results, narcissism was positively correlated with aggression, while self-esteem was negatively correlated with aggression. In addition, self-esteem was positively linked to good family-image. These findings suggest ways of supporting aggressive adolescence: (1) it is important that they experience positive and warm relationships with others (for example, therapists or counselors) and (2) such relationships would make it possible for them to control their excessive aggression and to enhance their self-esteem.